

盲腸炎と卒業式―昔の痛い話―……………

関根 みい子
(飯豊出身/東京都支部)

昭和36年、中学校の卒業式を一週間後に控えた3月13日の夜、緊急手術という事態が起きた。その日は登校時から腹痛があったが、毎月の事だから…と軽く考え授業を受けた。

しかし、下校時間には症状が悪化、学校下の田尻橋を渡る頃には、歩行も容易ではなく、新田内の家まで6キロもある通学路は遠く感じた。腹を押さえながら、何とか荒屋敷までたどり着き、母の友人でもある会田フミさん宅に飛び込んだ。

母が来たのは午後5時頃、すぐに医者に行くことにし、フミさんの息子で当時小学6年生のマサオ君が、リヤカーで八幡のバス停まで送ってくれた。おかげ様で最終バスに間に合い、一路新町へ。これで痛みも何とかなる…と思い

きや、着いた先は、なんと小学校下のイクちゃん宅だった。

イクちゃんとは、父のいとこで、初代教育長・中野市次先生の奥様(イクヨ)。物知り博士として、特に病気に関しては、医者より明るい人、と誰からも信頼される方だった。度重なる嘔吐と激痛に、イクちゃんは「盲腸クサイ、急性のようだ」と診断した。ここで初めて自分が病気であることに気がついた。父が来たのは午後9時頃で、すぐに総合病院へ向かったが、ここぼこ道に足をとられる父の背中中で必死に痛みに耐えていた。

検査の結果は、イクちゃん先生の診断通りで、医師たちは「一刻も早く!」と慌ただしく私を手術台に乗せた。一夜明けて、医師は「破裂寸前で、こうなるところ

(合掌)だったよ!」と笑っていた。

痛みも一段落し、卒業式へはナジヨするか。抜糸前の外出許可は出なかった。医師からは命の保証はないと言われても「卒業証書はこの手で…」と意志を通し、学校へ行った。式場では、藤田克己校長先生の「購買部の仕事を真面目に取り組み…」の真面目という言葉がとつても嬉しかった。

山田京子先生に抱きかかえられながら、同じ空気の中で皆と一緒に手にした卒業証書。ほんの2、3分の出席だったが、飯豊中学校の卒業生として満足した。



公立小野町地方総合病院からのお知らせ

「こまちダムまつり2013」に参加しました

当病院では、病院サービス向上の一環として、地域活動委員会を設置し、職員自ら企画し活動しています。このたび地域活動委員会では、7月27日に開催された「こまちダムまつり」に参加しました。

会場では、来場された地域の皆さんの健康管理に役立ててもらうため、血圧測定や健康相談などを行いました。当日は多くの皆さんに足を運んでいただき、普段の病院内の業務とは違った活動を皆さんに知っていただく機会となりました。

今後もこのような活動を通し、地域に

根ざした医療機関として、少しでも地域の皆さんの健康維持に貢献できるよう努力していきます。



健康相談の様子